

GF LECTURE

草食時代の仕事術

フリーライターの深澤真紀さんをお招きして講演会を開きました。



▲深澤真紀さん

6月12日、「現代社会と労働A」の授業とジェンダーフォーラムが共催で、深澤真紀さんをお招きして「草食時代の仕事術」の講演会を開きました。

深澤さんは、「草食男系」「肉食女子」の言葉を創出したフリーライターです。深澤さんによると、「草食男子」とは、そもそも「男の見栄」をはずらずに現実に即して生きることができ、女性ともうまくやっていけ、家事などの生活関連の作業が得意な近未来型のポジティブな男性像だったそうです。

「現代社会と労働」の授業でも何度か説明したように、1980年代、先進各国ではグローバル化で製造業がより低賃金の国へ出ていき、サービス産業化していきます。その中で、男性の失業や雇用の不安定化が進み、男性世帯主が家族を一人で養う条件が失われつつあります。日本も同様の環境下に入り、「男たるもの女を食わせなければならん」などと言っていたら自殺に追い込まれてしまうような経済状況が生まれています。そんな中で、女性とともに稼いで家計を維持し、身の丈にあった生き方ができる適者生存の男子像が「草食系」だったわけです。

それが、なぜか、「草食系は生命力が弱い」とか、「恋愛もできず子孫も残せない」とか、全く違う意味にとられてしまったことに深澤さんは憤り、本来の意味を理解してほしいと今回の講演会を受けてくださいました。



▲講演会は盛況でした

たとえば、草食系が増え、若者はセックスや恋愛に興味がなくなったと言われます。でも、それは「俺はモテる」と見せびらかす従来型の「見栄恋愛」が嫌いなだけで、「割り勘恋愛」や「友情恋愛」といった女性と対等な関係での等身大の恋愛は好きなのだと言われます。深澤さんは反論します。「今どきの若者は会社に興味がない」と言われますが、職人が好きとか、会社より仕事に関心があるだけというのです。海外へ出ることを嫌う覇気のない「草食系」が増えたという記事もあったそうですが、統計をよく見ると米国留学が減っただけで、北欧など留学先が多角化した結果にすぎなかったという事実もわかってきました。

どうやら、今の社会で意思決定層にいる高度経済成長期の亡霊のような価値観の人々が、低成長経済に即した男女が平等に生きる社会への変化を頑強に拒み、このような誤解・曲解を生み出しているようだと言われます。深澤さんは指摘します。

このように変化した社会では、仕事術も、これまでとは違ってきます。講演で提案されたのは、「自分をすり減らさない働き方」の大切さ、「努力すれば必ず成功する」などと考えず、「様子を見る」「無理しない」「あきらめる」ことも大事と知ること、そして「今の日本が最悪ではない、物事を否定するよりできることをしよう」という素敵な提案もありました。

「男らしさ、女らしさ」に自分を合わせて背伸びするのではなく、互いにあるものを生かして幸せに生きることの大切さを教えてくれた講演でした。

講演後、ジェンダー・フリースペースでの学生たちとの懇親会も開かれました。「気持ちが楽になった」「前向きに生きられる気持ちになった」と、みな明るい顔になっていました。ジェンダー平等とは、肩の力を抜いてありのままに生きることだったんだと実感させられたひと時でした。

(竹信三恵子・現代社会学科)



▲ジェンダー・フリースペースでの懇親会

The Annual Meeting of JAFEE

日本フェミニスト経済学会 2013年度大会

日本フェミニスト経済学会の大会にジェンダーフォーラムが協力しました。

日本フェミニスト経済学会の2013年度大会が、7月6日に和光大学で開催された。ジェンダー・フォーラムが運営の手伝いをし、フォーラムの委員を務める竹信三恵子氏と私(杉浦郁子)がシンポジウムに登壇した。

シンポジウムの論題は「不況はジェンダー格差をどう変容させたか」であった。以下では、4つの報告とコメントの内容を簡単に紹介したい。

まず、第一報告の永瀬伸子氏(お茶の水女子大学)が、約20年間の男女賃金格差の推移を分析した。この間、男性の賃金水準は下落。しかし、女性の非正規雇用者が増えたこと、大卒女性の出産による離職は他の学歴よりわずかに低い程度であり、いったん離職するとフルタイム雇用に戻らないこと、さらに、生涯シングルの女性の賃金もそれほど上がっていないことなどから、男女格差は埋まっていないという厳しい現実が示された。

第二報告の金井郁氏(埼玉大学)は、バブル崩壊後にサービス産業で一貫して賃金が下がった要因を、パートの労働時間の短縮にあると指摘した。たとえば、個人向け宅配便ビジネスを展開するある会社では、朝夕2時間という短時間の「主婦パート」を増加させている。そうしたかたちの女性の「活用」は、「女性の宅配員のほうがお客様は安心してドアを開けられる」という正当化——ジェンダーを巧みに埋め込んだ「サービス向上」のレトリック——により強化されているという。

第三報告の居神浩氏(神戸国際大学)は、夫婦ともに管理職・専門職・経営者等へのキャリア展望をもてない「ノンエリート」家族が増えていることを示し、大卒者の多くがノンエリートコースに進む現状を踏まえたキャリア教育のあり方を提案した。すなわち、企業と一定の距離を置き、仕事と生活のバランスを志向するようなキャリア教育であ

る。そうした「ノンエリート教育」を通じて、「ジェンダー平等」を担う主体の形成を目指すという方向性が示された。

第四報告は私が行い、LGBT (Lesbian, Gay, Bisexual, Transgender) の雇用や収入の実態を紹介した。①レズビアンは、一般女性と比べて非正規雇用率が低い、ゲイ男性と比べれば雇用も収入も不利な状況に置かれている、②ゲイ男性は、一般男性と比べると非正規雇用率が若干高い、③トランスジェンダーは、レズビアンやゲイと比べて、非正規率が高い、④LGBTは、生活保護を受けている割合が高い可能性がある、などの知見を、限られたデータから示した。経済問題にフォーカスした当事者調査の実施が今後の課題である。



▲竹信三恵子氏による問題提起

コメンテータの竹信三恵子氏からは、以上4つの報告をまとめながら、大きく2点の問題提起がなされた。①産業構造の変化にジェンダー規範が追いついていないことが

原因で生じている社会の閉塞感を、どのような方法で打開していけばよいのか。②個人やカップル、家族のあり方が多様化するなかで、どのようなデータ収集や分析ツールが求められているのか。

シンポジウムに参加して、経済成長期のジェンダー規範にのっとった選択(“男性が大黒柱”という選択)が、個人や家族のみならず日本社会全体に不利に働くことを再確認した。これから社会に出て家族を形成していく学生には、こうした実態を知ったうえで、自分にあった選択をしてほしいと思った。(杉浦郁子・現代社会学科)

2年目の木曜研究会

恒例の研究会で、らいてうの自伝を読みました。

昨年からはまった木曜研究会。今年は、日本のフェミニストたちの自伝を読んでいます。最初に、NHKの「女たちは解放をめざす～平塚らいてうと市川房枝～」(「日本人は何を考えてきたのか、昭和編・戦争の時代を生きる」第12回2013.1.27放送)を見てから、平塚らいてう自伝『原始、女性は太陽であった』を読み始めました。

平塚らいてうは、高校の日本史の教科書に載っている数少ない女性の一人で、日本初の女性の手になる雑誌『青踏』を主宰し、「新しい女」として話題を呼び、夏目漱石等の小説のモデルにもなった人です。『青踏』創刊号に寄せた一文「原始、女性は太陽であった」は、女性の自我の目覚めと解放を謳った宣言として、高く評価されています。この文章は、あまりにも有名で、らいてう自伝のタイトルにもなっています。

この自伝は、らいてうの生い立ちから、戦後に至る個人的な生活や社会活動を秘書の小林登美枝さんに話したことをまとめたもので、とても読みやすく、当時の時代状況や女性史を知らない人でも、容易に理解できます。しかも、らいてうの人生は、禅の修行あり、夏目漱石の弟子森田草平とのいわゆる心中未遂事件あり、『青踏』発刊の波紋の大きさ、結婚制度を拒否して奥村博との共同生活、市川房枝といっしょに設立した新婦人協会の顛末など、とてもドラマチックで、読み始めると、その魅力にどんどん引き込まれてしまいます。雑誌『青踏』を実際に手にとって、掲載された作品をいくつか読んでみたり、山川菊栄など同時代の女性の語りと比べてみたりしながら、日本の女性史におけるらいてうの位置を考えました。

明治時代の東京の中流・上流階級の家生活や学校生活、大正から昭和にかけての服装や髪形の変化、らいてうを囲む女性たちの人間模様などなど、毎回話は尽きず、結局、前期で、なんと上巻、下巻、完結編の3冊すべてを読了しました。後期は、市川房枝の自伝を読むことを予定していますが、その前に、森まゆみ『「青踏」の冒険』を読んでみようということになっています。この本は、最近(2013年6月)出版されたばかりで、『青踏』の舞台となった本郷・千駄木近辺で、1980年代から地域雑誌を発行していた著者が、平塚らいてうや同人たちの雑誌作りの苦労や工夫の跡をたどった興味深い本です。

この研究会は、卒業生を中心に集まっており、平均年齢がかなり高いので、時々、「若い人たちはどう考えているのかしら？」という話題が出ます。現役の学生さんたちにも参加

していただき、戦前の日本の女性たちの置かれた状況や、困難に立ち向かいながら自分の主張や生き方を貫いた女性たちについて、世代のちがう仲間と、いっしょに読んだり、感想を述べ合ったりできるとうれしいです。

(井上輝子・本学名誉教授)

GF ESSAY

トイレのナプキン入れをめぐる小さな疑問 在学生による身近な発見と問題提起です。

子どもたちが良く利用するとある公共のトイレで、いつもわたしは気になることがあった。そのトイレは二つ並んでいるのだが、男女の区別がない。それは良いとしても、他に変わったところがあった。それはナプキンを捨てる入れ物がないことだ。女性なら月経が来ることは、身体のリズムとして普通のこと。それなのに捨てる場所がないということは、暗に女の性を否定されているように感じた。教育の中で月経は恥ずかしいものと思わされている子どもたちは、困っていても言い辛いだろうと思い、管理者の人に疑問を持ちかけた。するとショックな返事が返ってきた。彼女らは50代ぐらいの女性たちだったが「昔はないのが当たり前だった。今は便利な時代になったけれども、あるのが当たり前とは思わないで欲しい」「気にしたこともなかった」「基本ごみは持ち帰りです。わたしたちはナプキンを捨てに行きたくない」というようなものであった。

わたしは便利とか不便だとかそんな話をしているつもりはなかったのに、全く理解を示してもらえなかったことをとても残念に思う。たかがトイレの話、そんなふう片づけられてしまうことはとても怖い。そのたかがトイレで、その施設の基本的な考えが透けて見えるのだ。このことを通して感じたことは、大人たちの性に対するまなごしの貧しさである。基本的な土台を共有できていないことで、通じあえないのはとてもくやしい。まずは大人が性を問いただしてほしい。そこから見えてくるものが、たくさんあるはずだ。

それにしても、自分の性を否定するようなメッセージや女・男らしさの呪いが蔓延している社会はとっても窮屈だ。らしさやこうあるべきとされているものって、だいたいうさんくさい。そういうものにちょっとおかしいなって反応するアンテナを持っていれば、騙されなくて済む。そんなふうにして、見えにくくされていることや語られないことを注意深く拾っていききたい。今はまだよくわからなくても、社会に起きていることで、絶対に自分と関係ないものなんてないのだから。(原田虹子・心理教育学科3年)

二つの部屋のその後と未来

和みの部屋とGFSの共同企画について報告します。

昨年度から取り組まれている「2つのフリースペースでの共同体づくり」をもとに、今年度前期には、第3弾「ザッお茶会」の企画を実施しました。今年度は、①和みの部屋の机や椅子等の配置が変わり、数人が一つの場所に集まって会話をするスペースやお茶用スペースが用意できなくなったこと、②これまでの合同企画の結果として、和みの部屋に人が集中していたため、ジェンダー・フリースペース（以下GFS）の存在を知らせる案内を強めたいと考えたこと、などを踏まえて、GFSに飲食物を置き、和みの部屋に来た学生にもイベントのお知らせとGFSに美味しいトン汁があることを教える方法で実施しました。

詳しい内容は以下になります。

企画名：「ザッお茶会」

日時：2013.5.9、12:30～14:30

場所：GFS、和みの部屋

実施方法：企画の2週間前にチラシで告知。貼り出し場所は和みの部屋とGFS。

以上の内容で実施したところ、出入りを含めて15人ほどの参加でしたが、1時間で40人分のトン汁がなくなりました。参加者の中には、学生だけでなく、GFSや和みの部屋に普段から足を運んでくださっている教職員や、「G棟1階のご近所さん」として新たな共同体が築かれつつある医務室・学生相談室の職員など、さまざまな人が交流し合う時間となりました。また、普段から和みの部屋によく来てくれる学生が、イベント当日は直接GFSに行ってトン汁を食べていたことや、和みの部屋に来た学生のほとんどがイベントの存在を知ると、興味を持ってGFSに足を運んでいたことも企画を続けてきた効果だと感じます。

“自分のペースを大切にしながらほっと一息つける”和みの部屋と“スタッフや教員と語り合いながら自分の時間を味わう”ジェンダー・フリースペースとの合同企画。それぞれの部屋の空間を維持しながら落ち着いた交流が生まれていたと思います。今後も2つの部屋の空間維持を大切にしながら、学生たちが誰かと繋がっていける時間を作っていきたいです。

(小澤笑子・和みの部屋スタッフ)

GFの活動記録とこれからの予定

2013年度のイベントをご紹介します。

— 2013年度前期のイベント《記録》—

“和みの部屋”共催企画「ザッお茶会」

5月9日(木) 於GFS

講演会「草食時代の仕事術」

講師：深澤真紀氏 6月12日(水) 於D202教室

学会「日本フェミニスト経済学会2013年度大会」

7月6日(土) 於Jホール

— 2013年度後期のイベント《予定》—

研究会「木曜読書会」

毎週木曜日13:00～15:00 於GFS

テキスト：『「青鞥」の冒険：女が集まって雑誌をつくるということ』森まゆみ著(平凡社)、『市川房枝自伝』市川房枝著(新宿書房)

町田市男女平等センター共催企画「デートDV講習会」

講師：深澤泰子氏 11月20日(水) 14:40 於J401教室

講演会「日本における『専業主婦』と『母性』神話の誕生」

講師：石川公彌子氏 11月29日(金) 13:00 於Jホール

石川氏との懇談会 同日14:40 於GFS

学祭への参加企画「ジェンダーカフェ+パネル展示

『和光における女性学の歩み』

11月2日(土) 12:00～17:00 於GFS

11月3日(日) 12:00～20:00 於GFS

フィールドワーク「井上輝子先生と『青鞥』の舞台を歩く」

11月4日(月・祝) 本郷三丁目～巣鴨

研究報告会「ジェンダーに関する卒論の発表会」

1月中旬頃

卒業スナップ撮影会「ソツスナ」

3月卒業式

どなたでもご参加いただけます。詳しくは、ジェンダー・フリースペースまでお問い合わせください。

Mail: gen-free@wako.ac.jp